青い草

小川未明

青空文庫

小さな姉弟は、父の目が、だんだん見えなくなるのを心配しました。

「お父さん、あのカレンダーの字が、わからないの?」と、壁の方を指していったのは、もう前のことであります。お父さんが、会社をやめてから、家の内にも夜がきたように暗くなったのです。

「私の故郷へ帰りましょう。田舎は、都会とちがって、困るといっても、田はあるし、畑があるし、まだゆとりがあります。いけば、どうにかならないこともありますまいから。」と、子供の母親がいいました。

「お母さん、田舎へ帰るの。」と、姉のとし子は、お母さんの体へすがりながらききました。

「ええ、帰りましょうね、そうするよりしかたがないんですもの。」

お母さんは、みんなの気持ちを励ますつもりで、いいましたが、また、すぐに涙ぐんでしまいました。

「おれに故郷があるとなあ。」と、父親は、瞳が白くなって、生気を失った目で、あたりを見まわしながら、答えました。お父さんには、もう、両親もなければ、また帰るべき家もなかったのでした。

「どちらの田舎へ帰っても、同じでありませんか? 私の兄はあのとおりしんせつな人ですし、まだ母も生きていますし。」と、お母さんはいいました。

「そうすれば、僕、田舎の学校へ上がるの。」と、義坊が、ききました。
「おまえも田舎の子になるのよ。山へいったり、野原をかけまわったりして、きっとじょうぶになりますよ。とし子は、もうあと二年ですから、卒業したらお裁縫でも習えばいいと思います。」
父親はだまって考えていたが、
「できるなら、子供たちをこのまま、こちらで勉強さしてやりたいものだな。」といいました。
「あなた、それができるようなら、これに越したことがありませんけれど、そのお体でこの先どうしてやっていけますか?」
母親は、自分になんの力もないのを、面目なく思ったのです。
「なに、私にだってすこし考えがある。」
父親はさびしく笑いながら、二人の子供のいる方を向いて、
「おまえたちは、お母さんの田舎へ帰ったほうがいいか、それとも、こちらで、いくら不自由をしても暮らしたほうがいいか、どちらがいいかな?」ときききました。
もうまったくの子供ではなく、いくらかもののわかるとし子は、この際いかに負けぬ気であっても、それはむだなことと思いました。それよりか、お母さんのおっしゃるように田舎へ帰って、自分はどんな手助けでもするから、一家のものが、無事に暮らしていけることを願った

のでした。

「私はお母さんの田舎へいったほうがいいと思うわ。」と、とし子は、答えました。

「僕は、賢ちゃんや、正ちゃんと別れるのはいやだから、こっちにいるほうがいい。」

今年から、小学校へ上がったばかりの義坊がいいました。

父親は、手さぐりで義坊の頭に手を置いて、

「義坊や、おまえと二人でこちらにいようか。」

「お父さんと、お母さんと、別れるのはいやよ。」と、とし子は、泣きながらいいました。

母親もだまって、そっと目の涙をふきました。

「まあ、私はやってみる。こうなれば、恥も外聞もない。明日からでも、町の角に立って、尺八を吹くつもりだ。」

日ごろから、お父さんの尺八に感心している一家のものだけれど、世間の人たちが、はたして自分たちと同じように感心するか、また感心はしても、金を恵んでくれるだろうか、まったく見当がつかなかったのです。

「お父さんは、うまいんだから、みんながきっと、お金をくれるよ。」

「この時節ですもの、なんでお金になどなりますものか。」と、お母さんはいいました。

町の角に石造りの銀行がありました。前に、三坪にも足らぬあき地があって、そこへ青い草

が芽を出しました。低い柵には鎖が張られていたが、大人なら造作なくまたいで入ることができたのです。義坊の父親が立って尺八を吹くのはその柵のところでした。

「いつか、よっぱらいが、たおれていたところへ草が芽を出した。」と、義坊はいいました。どこのおじさんであったか知らないが、お勤めの帰りによっぱらったとみえて、黒い外套は泥だらけであったし、握っている洋傘が、折れそうに、曲がっていました。巡査が見たら、なにかいうであろうと、義坊は、心配をしたが、そのとき、巡査は通ったけれども目に入らなかったようです。その後、雨が降りつづきました。その雨で草が生えたのでありましょう。

土曜の日には、早くからここへきて、父親は尺八を鳴らしたのでした。

ふいに、義坊が叫びました。

「あっ、あんな花が咲いた！」

小さな白い花が、草に咲いたのであります。ガラス窓のうちで、仕事をしている人にもまた、この鋪道を通る人々にも、おそらく、この花は知られなかったでしょう。ただ、これに気のついたのは、自分ばかりのように思えて、義坊は、なんだかうれしくてしかたがなかったのです。

彼は、柵の下から頭を突っこんで、腹ばいになって、その花を取ろうとしました。こんな遊びは、原っぱでもなければされぬことで、このにぎやかな町の中では、まったく珍しい、しかいのあるいたずらにちがいありません。義坊は手を伸ばして、その白い花を取ろうとしました。その瞬間です。どこから飛んできたか、朽ち葉色のちょうが、花に止まろうとしました。義

坊は、おどろいて急に手を引っこめて、ちょうのするさまをじっと見守っていました。ちょうは花にとまって、羽を休めたかと思うと、また舞い上がって、煤煙と物音で、かきにござされている空を、どこともなく飛んで消えてしまいました。その行方を見送りながら、義坊はぼんやりとして、不思議に思ったのです。そして、ちょうのために、白い花を残しておく気になりました。

「義坊や、あっちのお店では売れたかな。」

二間とは離れぬところへ、赤い珠と、白い珠と吹き上げるおもちゃの噴水や、ばね仕掛けのお相撲の人形を売る、露店が並んでいたのでした。

「さっき、子供がたくさん立っていたが、だれも買わずにいってしまったよ。」

「そうか、不景気だなあ。」と、父親は、ため息をつきました。まだ、今日は一人も銭を投げてくれなかったのです。

義坊は、以前、いろいろなおもちゃを父親から買ってもらったことがありました。しかし、いまは噴水や、相撲の人形などを見ても、自分には縁の遠い気がしたし、べつにほしいとも思いませんでした。ただ、そんなおもちゃを買うことのできる子は、しあわせな子供と思っていました。デパートの屋根には、アドバルーンが高く上がっていました。風が寒く、雲が低かったのです。近所の店で鳴らす、蓄音機の音が、いつかお母さんの田舎へいったとき、丘の下の小学校で、女の先生がひいていたオルガンの音を思い出させました。

その先生は、紫色の、長いたもとのついた羽織を着ていました。

「お父さん、不景気でだめだから、お母さんの田舎へいこうね。」

義坊は、こういいました。なぜか、お母さんの田舎へいこうというと不幸な父親は、いつでも、だまってしまうのです。

「また雨かな、だいぶ寒くなった。もう、すこしやって、お家へ帰ろうな。」

父親は、尺八を持ち直して、思いきり深く息を吹き込みました。

うさぎ追いしかの山　小ぶな釣りしかの川

夢は今もめぐりて　忘れがたき故郷

道を急ぐ人々の中には、立ち止まって、じっと耳をすます青年がありました。また、女の人がありました。その人たちは、しまいまでその歌に聞きとれていました。

こころざしをはたして　いつの日にか帰らん

山はあおき故郷　水は清き故郷

と、父親が、うたい終わったときに、あちらからも、こちらからも、お銭が二人の前に落ちたのであります。義坊は拾うのに夢中でありました。

やがて、草の白い花が、うす闇の中にほんのりとわからなくなるころ、哀れな父親のたもとにすがりながら、勇んで帰っていく子供がありました。それは義坊であります。

沈みがちに歩く父親に向かって、

「ねえ、お父ちゃん、きょうはよかったね。また、あしたもあんな歌を吹きなさいよ。」と、いったのでありました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　13」講談社
　1977（昭和52）年11月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「亀の子と人形」フタバ書院
　1941（昭和16）年4月
初出：「教育行童話研究」
　1938（昭和13）年4月
※表題は底本では、「青《あお》い草《くさ》」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2017年3月30日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い草

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/